

学問で国を濟ふ日 倉田一郎のもとに残された柳田國男の手紙と葉書

Research Materials

戸塚ひろみ

I、解説

はじめに

倉田一郎が柳田國男とであったのは昭和九（一九三四）年、柳田の書齋で開かれた第一回・木曜会の席に、守隋一に連れられて参加したときであったといわれている。守隋と倉田は、ともに出入りしていた高輪教会を通して親交があった。倉田はまた、この頃、叔父である奥野七郎の東京外国語学校時代の同級生・鈴木文史郎（朝日新聞社論説委員）に柳田への紹介を頼んでもいたという。

倉田は、この時から柳田國男のもとで、民俗学を本格的に学び始める。今回紹介する通信資料（手紙・葉書）は、この時以来、倉田の死後昭和二十二年にいたるまで、倉田本人や倉田の遺族のもとに送られた柳田國男の手紙や葉書が中心になっている。これらの資料はいずれも、倉田家に大切に保存されていたものである。

手紙や葉書には、その年月日を明確に確定できないもの、内容の背景を十分に詳らかにできないものもあるが、木曜会・民間伝承の会の周辺ならびに倉田一郎をめぐる学史研究が、進展することをねがって倉田家のご好意により資料として公開することにした。

資料の紹介にあたって、既に私が公刊している倉田一郎の評伝（戸塚ひろみ「解説 倉田一郎、生涯とその業績」〔谷川健一責任編集『日本民俗文化資料集成 第十六巻 農山漁民文化と民俗語 倉田一郎集』三一書房一九九五〕に依拠しながら、倉田一郎の人生と、これらの手紙資料の背景について、ごく簡単な解説を付しておきたい。

一、倉田一郎と柳田國男

倉田一郎は、明治三十九（一九〇六）年十月二十八日、富山県高岡市で漆器制作を営む倉田乙吉、みき夫婦の長男として生まれた。その後、定塚町尋常小学校を経て、父・乙吉も通ったという富山県立工芸学校（現在の富山県立高岡工芸高等学校）の機械電気科に入学する。倉田は、そこで、文芸誌の同人活動に関わるが、結局、学業は本科の途中で退学す

る。そのころ倉田は、学校にとってかわるべき自らの場を求めるように、高岡市の高岡伝道教会（現・日本基督教団高岡教会）に関わるようになる。当時、青年たちがモダンな西洋文化に直接触れることができる場の一つであった教会で、倉田は生涯の友に出会うとともに、教会の機関誌活動などを通して文学への関心を募らせていった。

そして、倉田は大正末に小説家をころざし、上京し、一時期、室生犀星の弟子の村井武夫とその友人・窪川鶴次郎らとともに下宿生活を送っている。大正十三（一九二四）年に、日本書院から小説『太陽は輝けり』を、大正十四（一九二五）年に『小説の創作と技巧』（至上社）を上梓したが、評判にはならなかった。同年には、菊池寛の書生になり、文芸春秋に出入りし原稿取りの仕事などをしたが、しかし、三ヶ月ほどで菊池のもとを去り、結局小説家を目指した倉田の活動は、二冊の本を出版して終わった。

倉田はその後、昭和二年に叔父の紹介で警視庁衛生部衛生課に就職し、以後、昭和十五年までそこに務める。こうして、サラリーマン生活を送りながら、教員になるという目標を持ち、教員試験を受けるなど、次のステップに向けて備えていった。

昭和初期には、郷里の高岡で、独自の考古学発掘調査を試みて『越中国高岡における石器時代遺跡』（『人類学雑誌』一九三〇年五月）を発表するなど新たな関心を広げつつあった。またこの頃には、国語研究に関心を寄せるなど、次第に文学から考古学、国語研究、民俗学へと近づいていったと考えられる。

そして倉田は、出入りしていた日本基督教高輪教会（現・日本基督教団高輪教会）で知り合った守階一に誘われと思われるが、昭和九（一九三四）年一月、柳田國男の自宅で催された第一回木曜会に出席し、それから木曜会のメンバーの一人として民俗学研究に没頭していくことになる。

また、それまで転居を繰り返していた倉田は、昭和一〇年頃に品川区下大崎二丁目二階家を借り、故郷高岡から両親を呼び寄せて以後昭和二十年までそこで暮らすことになる（柳田から倉田に送られた葉書や書簡の多くが、この大崎の家に宛てられたものだった）。

昭和九年五月には、木曜会を中心として三カ年にわたり実施されたいわゆる「全国山村調査」がスタートし、倉田は、調査員の一人として、神奈川県津久井郡青根村（現・同郡津久井町）、和歌山県日高郡上山路村（現・同郡龍神村）、栃木県安蘇郡野上村（現・同郡田沼町）、宮崎県児湯郡西米良村などへ赴き、精力的に調査をしている。

警視庁の衛生部に勤めながら柳田のもとに出入りし、民俗学研究に携わった倉田は、ことに「言葉」に対する問題意識を形にしはじめ、昭和十一（一九三六）年に、『生活解説と方言』（『民間伝承』一九三六年四月）を発表するなど、民俗学の立場から、生活のなかの言葉を生活全体とのかかわりで理解しようとする態度を先鋭化させていった。そして昭和十一（一九三六）年八月には『栃木県安蘇郡野上村語彙』を出版し、昭和十七（一九四二）年には論文集『国語と民俗学』を世に送り出している。こうして倉田の関心の成長は、もちろん、この時期に柳田が『国語論』を積極的に形にし、「標準語政策」に対する批判を展開していた時期と重なっている。その意味では、柳田の強い影響下で具体化された関心であったことも確かだろう。しかし、小説家志望から紆余曲折を経て、民俗学に至らの場所を見つけた一人の青年が、民俗学の最も根幹に位置する、言葉に対する思想に敏感に呼応したことを、積極的に評価する必要があるだろう。

二、柳田國男の時代（朝日文化賞受賞授賞）

こうして倉田一郎が、木曜会に出入りし、柳田國男のもとで民俗学研究に邁進していた時期は、柳田國男もまた、木曜会同人を中心に民俗学

を全国展開させていく最も充実した活動をしていた時期でもあった。

そうした柳田の実践の一つのピークが、昭和十五（一九四〇）年度の第十二回「朝日文化賞」の受賞であったことが、昭和十六（一九四一）年二月十日に倉田に宛てられた通信からうかがえる。

外の人に頌つとすると「朝日文化賞所感」といふ題ハ少し自慢めく故に「民俗学の三十年」、「民俗学第二期」又ハ「郷土 研究以後」とでもかへて小見出しハなしたし 但し二十五日二間に合ハぬときまれバや はりもとの通りが望ましく候又何かよい 題があつたらかへてもよろしく候少し 無理とハ思ふが此雑誌を六七百部知らぬ 人ニくれるといふ快味ハ味ひたく候

二月十日

何かのタイトルを指示している通信だが、「朝日文化賞所感」といふ題ハ少し自慢めく」という一文が、柳田自身の受賞に対する喜びとそれに対するある種の「照れ」のようなものが見え隠れする。

この葉書にさかのぼること一ヶ月、昭和十六年一月十日の『朝日新聞』は、「十五年度朝日賞受賞者決定 燐たる六氏の業績」という見出しで、同賞受賞者を紹介する記事を掲載した。「色盲検査表の研究」の石原忍、絵画『彩雨』の日本画家・川合玉堂、銅像『和氣清麻呂』の佐藤清蔵、美術雑誌『国華』による東洋美術文化の宣揚で滝精一、「交響楽運動と創作活動」で音楽家・山田耕作、そして「日本民俗学の建設と普及」という理由による柳田國男、の六名であった。

同記事には、さらに各受賞者のプロフィールを紹介しており、柳田はそこで、次のように語られている。

〔略〕我が学界に先人未踏の処女地を切拓き独自の日本民俗学の礎石を築いた柳田國男氏の研究は、古く明治時代に始まり、三十有余年の長き

に互るが、その間柳田氏は独力を以て全国の山村僻地を隈なく調査し膨大な資料をあつめたが、同時に「民間伝承の会」を興して広く同志を募つて民俗学の普及に努め、従来軽視されてゐた民間の伝説習俗等を新しい歴史観、社会観から取上げて、従来顧みられなかつた農民、工人、商人など我等の祖先の大半を占めてゐた民間人の生活を中心に活々とした過去の精神生活を平易な表現を以つて国民の前に再現した。即ち従来の文献のみによる日本文化史の研究に依らずとなしたる氏は専ら民間伝承記録による過去の日本文化探求といふ新鮮独自の方法論を確立し、日本民俗学の進むべき方向を指示したのである。」

そして、特に昭和十五年度の受賞対象となつた理由について、「その研究は昭和十二、三年頃よりとみに脂が乗り、特に十五年度においては『伝説』『妹の力』『食物と心臓』『民謡覚書』などの力作を発表、また『雪国の春』『秋風帖』『海南小記』等の絶版となつてゐた旧著をも再版発行し国民大衆に対して過去の日本文化に対する関心と畏敬と親しみを与へた功績は一種の国民運動として貴重なもので、特に二千六百年を記念する朝日文化賞として氏の業績を表彰する所以である」としていた。

西暦に対抗して明治期に新たに創出された、神武天皇の即位を起点としてカウントする「皇紀」という独自の暦のなかで、ちょうど二千六百年目の区切りとしてことさらに意義ある年とされた昭和十五の受賞であった。その時、「新鮮独自の方法論」により「日本」の文化史を語る柳田の民俗学という実践の価値が、殊に「朝日文化賞」という形で社会から承認されたことになる。

新聞が列挙した『妹の力』『食物と心臓』『民謡覚書』『雪国の春』『秋風帖』『海南小記』はいずれも創元社の創元選書として出版されたものであった。石井正己は、折口信夫がこの創元選書により柳田の学が人口に膾炙していったと指摘していることに触れ、この創元叢書を、柳田の民俗学が社会的に受け容れられていった一つの契機であつたとしている

(石井正己)「柳田国男の創元選書」『東京学芸大学紀要』第二部門 人文科学 第四十七集 (一九九六年)。

つまり、柳田国男の仕事が、創元選書という媒体を得たことが、こうした朝日文化賞の受賞に繋がったといっても過言ではないだろう。

同年一月二十日に東京丸の内蚕糸会館講堂でひらかれた授賞式では、和辻哲郎が「日本民俗学が、今までに当然受くべきであった承認、尊重、賞賛を、いよいよ決定的な形でもって、広く一般の社会から受けたといふことを意味します」と紹介し、それを受けて柳田は、「今度の表彰は全く思ひ過ぎることで、当人の私は申すまでもなく、周囲の者までもが、其んなにも嬉しいものかと思ふほど喜んでおります(略)今まで君もやって居たことは社会の為になる仕事だと、斯うして承認して下さいたといふことは、特に私の良心に対する最大の慰安でありまして、幾ら御礼を言つてもたりません」と、受賞を、社会な「承認」を意味するものとして素直に喜び感謝している。

柳田が倉田に宛てた先の葉書にもどらう。「二十五日」に間に合えば、としている二十五日とは、昭和十六年二月二十五日に民間伝承の会主催で予定されていた朝日文化賞記念の講演会「日本民俗学講演会」を意味していた。そして、柳田が「少し無理とハ思ふが此雑誌を六七百部知らぬ人にくれるといふ快味」を味わいたいと言っている「雑誌」とは、民間伝承の会の機関誌『民間伝承』のことであり、毎月一日発行の雑誌を、この時に限って二十五日の講演会に間に合わそうとしていた。そして柳田は、この講演会を、未知の人びとに「民俗学」を知ってもらう好機と考え、六〇〇人から七〇〇人は集まると思われる人々に『民間伝承』を配らうと目論んでいたのである。

この葉書は、当時、『民間伝承』の編集に携わっていた倉田一郎に対し、そこに掲載する柳田の朝日文化賞受賞の挨拶文のタイトルの指示をしたものなのである。この時の柳田の原稿は、現在も倉田一郎令息、倉田静

也氏のもとに、「朝日文化賞所感」(記念講演会の晩の挨拶)と記された袋に入って保管されている。

柳田がここで倉田にタイトルを打診しながら、自らの学問の名称をどうするかということと、その開始の時期を何時に設定するか、ということに考えをめぐらせていることに注目しておきたい。「民俗学」という名前を使うことに比較的慎重であり続けてきた柳田が、この時には、「民俗学」という名称を前面に押し立てようとしているように見える。そして、自らが実践していきたくした学問のスタートをどの時期に設定するか、その「民俗学」創設の起点を三十年前に位置づけ、三十年間の蓄積の上に朝日文化賞にいたる「民俗学」の歴史があるという、ストーリーを形にする意図と、そして自負があったのではないかと、思われる。三十年前とは、一九一〇(明治四十三)年前後の時代を指しており、一九一〇年は、五月に『石神問答』を、そして六月に『遠野物語』を、十二月には『時代と農政』を世に公表していた。また、新渡戸稲造を中心に郷土会を設立したのも、同年二月であった。そこから、決して一直線にすすんできたわけではなかった柳田の実践が、「民俗学」へと収斂していく三十年の道のりとして歴史化されていく筋道が、この昭和十五年の朝日文化賞受賞を契機に、明確に引かれることになったのである。それは、柳田自身による、一つの意図的な選択でもあったといえるだろう。

そしてまた、もう一つの「民俗学第一期」というタイトル案には、この昭和十五年以降を「第二期」として新たな時代へと踏み出す意図が込められていたとも見える。

結局、柳田国男の挨拶は、「民俗学の三十年」と題し、『民間伝承』六巻六号の巻頭を飾り、編集後記には倉田一郎が「朝日文化賞授賞式に於ける柳田先生の御講演の草稿を講うてのせた」ものであることを記している。

民間伝承の会主催の二月二十五日の講演会については、『民間伝承』

六卷七号に以下の報告が掲載されている。

「本会主催の民俗学講演会は二月二十五日、午後六時より左の如く開催せられた。未知の士が多数参加され、近頃になく賑々しい会であった、於 麴町区産業組合中央会議室

一、次の代の為に

柳田國男

一、家族制度

橋浦泰雄

一、国語と民俗

倉田一郎

一、文化圏

関敬吾

一、日本民俗学の過去及び将来

折口信夫

そこには、橋浦、関とともに、折口とならび、柳田の脇をかためる、倉田一郎がいた。自らの実践が社会的に評価され一つの「時代」を作りつつあった柳田國男のもとで、倉田もまた、新たな自らの役割と可能性を、手ごたえを持って実感していたはずなのである。

柳田が朝日文化賞を受賞した昭和十五年は、倉田にとっても一つの転機の日であった。鈴木文史郎の紹介で、青山学院中等部の教師として赴任し、かねてからの希望であった教職の道についた。そして四月には、知人の紹介で同郷の渡辺二三枝と結婚している。

一方研究者としては、昭和十七年には、先に触れた初の民俗学の論文集『国語と民俗学』、昭和十九年には稲作を主題に『農と民俗学』を上梓した。

しかし、一九四五（昭和二十）年、戦局が悪化し、東京が激しい空襲に見舞われるようになり、同年五月、品川区下大崎の倉田の自宅は焼夷弾の直撃を受け、炎上、倉田は家財とともに二千冊以上の書籍や数万枚のカード類を失ってしまう。翌六月頃、倉田一家は富山県西砺波郡北山田村守宗に疎開する。そして、六月末に、倉田のもとに召集令状がとどき、倉田は入営する。終戦まで毎日訓練に明け暮れたというが、結果的に、

この軍隊生活で倉田は胃腸を悪化させ、体調を崩し、その後ついに体力を回復させることができなかった。

三、倉田一郎への柳田のまなざし

柳田から倉田一郎にあてられた通信を通読すると、そこにたびたび記されている柳田の倉田自身や家族に対する細やかな配慮の言葉が印象に残る。

昭和十一年以降のある年に倉田に出されたと思われる次の柳田の手紙は、もっぱら倉田の健康を気遣うものであった。

「市谷の幼年校の前あたりに京都大学出身の中村さんといふ医学博士あり専ら和漢薬を以て病を治し看效ありと安成三郎君申され候この人夫婦共に肺炎の気味なりしに此先生の薬にていよいよ本年は二人つれにて白馬登山をしたと大よろこひに候君などの風邪は氣にするから却つてなほりにくいかと存し候 一度今のうちに此人の診察をうけ安心しなから勉強をつ、け給ふべく候 薬礼は失費のやうなれとも愉快に働き為れはその分を取かへすことも困難ならずと在し候」【昭和十一年以降】九月五日

「君などの風邪は氣にするから却つてなほりにくいかと存し候」というやや厳しめの言葉とともに、医者診察を受けるよう促していた。

昭和十一年五月二十六日の葉書は、「漁村語彙」の編集についての要件を記したのだが、「御両親様志もなく候哉」と倉田が郷里から呼び寄せた両親に氣遣い、昭和十五（一九四〇）年四月八日の葉書は、おそらく柳田の不在のときに尋ねた倉田に対する詫び状であるが、末尾に「御家庭御平安母君も徐々に御恢復のこと、存候御一同によりしく御傳へ披下度」と倉田の母の病状や家族への言葉を記す。

昭和十七（一九四二）年二月二十六日の、校正に関する事務的連絡の葉書には、「御子たち元氣にや母君内君にもよろしく」と申し添えられ、

翌十八年七月二十日の、『神道と民俗学』再版にあたって誤植の指摘などを依頼する葉書では、「母君内にも御見まひのことバ申上度よろしく御傳被下度候」と倉田の母と妻への気遣いとともに、この年の四月二十三日に長男を失った倉田に「初盆御さびしき御察し申候」と見舞う。

柳田が、倉田の私生活とどれだけ関わっていたかは詳らかではない。しかし、これらの言葉は、単なるに挨拶の言葉と以上、倉田の家族や倉田自身に対してそそがれた柳田のある配慮の視線を読み取ることができるのではないだろうか。

柳田の倉田への配慮の言葉は、入営した倉田が終戦で除隊してから体調を崩し、一家とともに富山で暮らしていた倉田に宛てられた、昭和二十年後半以降の通信では、いっそう切実さを増してくるようみえる。

同年十月三十日に、富山の倉田のもとに送られた葉書は、「御手紙委曲拝見出来るなら當分御休養可然と存し候 今はちつとしてハ居られぬ日が来るべく候 全体に君ハ自分のことばかり考へすぎるから神経衰弱なんかになるのでそんなことを言つて居たら学問で国を濟ふ日は到底来ぬだらうと存申候 十月二十六日」と、強い調子で、倉田を叱咤していた。倉田がどのような手紙を柳田に宛てたかは不明だが、除隊後体調がすぐれない状況を報告したのではないかと推測される。柳田はそれに対して、「全体に君ハ自分のことばかり考へすぎる」と返し、「そんなことを言つて居たら学問で国を濟ふ日は到底来ぬだらうと存申候」と厳しく諭していた。

離れたところに居り様子がわからない倉田に、いらついているようにすら見える強い調子がうかがえるその文面は、「働かねばならぬ世」を痛感し民俗学が国に役立つときがきたと自分を奮い立たせていた柳田自身の高ぶり、柳田とともに立つべき倉田に対する期待が、ないまぜになつているように読める。遠い富山で仲間からも離れ、軍隊で消耗した身体をいたわりながら、家族をかえ職場復帰すらままならない状況に

あった倉田自身が、この文面をどう受け取ったかは、わからない。

しかし少なくとも柳田は、「学問で国を濟ふ日」をともに志す同志として倉田を見ていたことは確かだろう。

昭和二十一（一九四六）年一月二十九日に柳田が、富山に居る倉田に宛てた葉書は、おそらく倉田が書き送ったであろう近況報告に対して「冬の御音信よろこひ拝見」と応じ、「御病氣一進一退のよりなれども御文面にハ病苦のあとなく闘病勝利疑なしと存候御一家御元氣何よりのことに候東京も 煩はしさあぢきなさハ御推想の外に候」と、「闘病勝利疑いなし」と激励する一方で、その葉書のオモテに記された文面には、「どこが一ばん苦しいか御申越あり度 何か療治ニ付便宜あるかもしれず候」と、遠くで闘病する倉田の苦しみに近づこうとする柳田の姿が記されている。

そして、倉田は、昭和二十二（一九四七）年五月二十日早朝、「衝心性脚氣」で急逝する。

五月二十八日に、柳田は、その「思ひかけぬ電報」を受け取り「茫然として居ります」と倉田の妻・二三枝に手紙をしたためている。「あなたの御力落しは申すまでもありませんが御母様が年を御取り被成てこの御別れは何とも御痛はしいことです」と息子に先立たれた老いた母を氣遣い、「私も今頃この様な悲みは堪へかたいことですしかし小さい御子の為にあなたは 最も賢明な考へ方をしなければなりません突つめたあきらめだけで無く是から段々前途を開いて行くやうな計画を御立てにありませんそれには何よりもからだを大事にして下さい」と記す。倉田の遺家族に対する柳田の細やかな心遣いがうかがえるのではないだろうか。

柳田は、自分のまわりに集まった者たちのプライベートな問題にあまり関わろうとしなかった、という印象を、私は根拠はあいまいなもの、持っていた（たとえば、今野圓助〔今野「先生と師匠と」』『定本柳田國男

集月報28(一九七〇)など)。

ところが、改めて倉田に宛てられた柳田の手紙や葉書を読むと、そうした印象は、若干かわってくる。それが倉田に対する特別なものだったのか、それとも柳田がまわりの者たちにはしばしば見せていた姿勢なのかはわからない。

しかしそれは、オーガナイザーとしての柳田の懐の深さを垣間見せているようにも見える。私信を紐解くことは、柳田が、「学問で国を濟ふ日」をともに志す同志をどのようにまわりに形成していったかを知る上でも、意義があるのではないだろうか。

付記 本稿の「一」は、戸塚ひろみ「解説 倉田一郎、生涯とその業績」〔谷川健一責任編集『日本民俗文化資料集成 第十六巻 農山漁民文化と民俗語 倉田一郎集』三一書房 一九九三〕を要約したものである。詳細はこれを参照されたい。また「二」は、二〇〇五年九月二十三日に、共同研究会で報告した内容の一部である。

倉田家の深いご理解のもと資料の閲覧や聞き取りをはじめ、故・夫人倉田二三枝さん、故・ご令弟倉田利男さん、そしてご子息の倉田静也さんには大変にお世話になりました。また倉田一郎に関わる柳田國男の手紙・葉書を公表することについて、柳田家より御快諾いただいたことを記して感謝します。

資料の翻字にあたっては、北九州市立大学文学部の園田豊先生のご協力とご教示を賜りました。また、『柳田國男全集』(筑摩書房・現在刊行中)編集委員の石井正己さん、小田富英さん、柳田國男研究会の高橋治さん、成城大学民俗学研究所にもご教示を頂きましたので、列記して感謝します。

II、資料

凡例

- 一、これらは倉田家に所蔵されていた柳田國男の通信(葉書・封書)である。その全てが倉田一郎宛の手紙ではない。倉田一郎の死後、遺族に宛てられるものなども含まれている。
 - 二、資料は、年月日・封書の別、消印、宛先、差出、本文、註、覚書の順に記し、時系列を基本として配列した。
 - 三、原則として戸塚が補注として記したものは全て【】で挿入した。
 - 四、年月日は、1 柳田國男による年月日の記載、2 消印宛先住所等、3 手紙葉書の内容、4 柳田自作の写真葉書の場合、使われた写真の年代等により推測した。明確ではないもののある程度推測できる資料は、その旨を註または覚書に記し、蓋然性の高い箇所配置した。また、現時点で全く年月日を推測できないものは、後に一括して掲載した。
 - 五、柳田國男が自分の写真を使用して作成した葉書については、大藤時彦・柳田為正編『柳田國男写真集』(一九八一)で確認できる写真は、その旨を註に記した。
 - 六、改行箇所は、原則としてひとマス空けとしたが、原文の書き方によっては、原文に従い分かち書きで示したものもある。
 - 七、判読不能箇所は□とし、翻字が、候補にとどまるものは「?」とした。
 - 八、註、覚書に引用・言及した文献は、下記のように略記した。
- 大藤時彦・柳田為正『柳田國男写真集』一九八一 岩崎美術社↓
 〔写真集、○頁〕
 後藤総一郎監修・柳田國男研究会編著『柳田國男伝』一九八八 三一書房
 ↓〔伝記、○頁〕
 戸塚ひろみ「解説 倉田一郎、生涯とその業績」〔谷川健一責任編集『日本民俗文化資料集成 第十六巻 農山漁民文化と民俗語 倉田一郎集』三一書房 一九九三〕を要約したものである。

民俗文化資料集成 第十六卷 農山漁民文化と民俗語 倉田一郎集 三一書房

一九九三

↓〔戸塚、一九九五〕

戸塚ひろみ「相州内郷村調査その前夜 柳田國男の書簡から」〔柳田國男研究年報4 柳田國男・民俗誌の宇宙〕岩田書院 二〇〇五

↓〔戸塚、二〇〇五〕

柳田國男研究会編著『柳田國男伝別冊 年譜・書誌・索引』一九八八 三一書房

↓〔年譜、〇頁〕

『柳田國男全集』全三十六卷（筑摩書房 一九九七）刊行中

↓〔全集〇巻、〇頁〕

1、大正七（一九一八）年八月十三日

（封書、封筒欠、年代記載ナシ、和紙毛筆、縦書き 宛先「鳥居元忠」 差出「國男」）

雑誌ハ一字も残さずに讀尽し候自分で作つて居た時よりも何倍かおもしろく候 如何なる場合にも外部の事情にて中止することなきやう声援仕度在居候 相州行明後早朝二迫りたる為十分なる御手傳出来ず残念に候も此後ハ追々書ため小生が経験せし如き不安は減じ度と存候 萬朝報記者木下猛⁽³⁾大隅志布志の人にて此方に志ある青年なり手紙にてご依頼被成候ハ、何か報告してくれるやう曾て約し置候 田村君⁽⁴⁾の葉書は御紛失被成ぬやう願候 津久井⁽⁵⁾へハいつなりとも御出披成へく候 但し 一人分しか寝具ハ無之候

八月十三日

國男

鳥居元忠⁽⁹⁾

待史

(1) 大正七（一九一八）年八月五日創刊、折口信夫編集・『土俗と伝説』

(2) 大正二（一九一三）年三月創刊、柳田國男編集・『郷土研究』

(3) 木下猛（一八八八〜一九四七）新聞記者

(4) 奈良県の『郷土研究』への投稿者、田村吉永（一八九三〜一九七七）と思われる。

田村は『土俗と伝説』に投稿している。

(5) 津久井は現在の神奈川県津久井郡相模湖町のこと。

(6) 内郷町とは、郷土会が主体となり大正七年八月十五日から二十五日まで十一日間にわたり村落調査が展開されたところ。

(7) 調査時の宿泊場所

(8) 輿瀬停車場（現・相模湖駅）

(9) 「鳥居元忠」とは、折口信夫のことを指しているのではないかと考えられる。その推測の詳細については、既に〔戸塚、二〇〇五〕で論じている。参照されたい。

覚書

この手紙は、倉田家に所蔵された柳田國男の通信のなかで、唯一、倉田一郎または倉田の家族に宛てられたものではない。それがなぜ、昭和九年以降に柳田との関わりが始まった倉田のものにあつたのか、その経緯はわからない。そもそもこの手紙が、一度差出人から宛先人へとわたったものか、否かもわからない。

2、昭和九（一九三四）年八月十日

（柳田自作葉書消印9・8・10、宛先…芝区白金猿町七七持塚氏方 倉田一郎殿、

差出【印刷で】東京市外砧村（電話二二六）柳田國男

平山敏次郎君⁽²⁾の番地ハ 本所東兩國一ノ十一 到有之候此方よりも手紙を出しおき居候へ共或ハまだ房洲⁽³⁾に居るかを恐れ申居候御好意ハよく傳へ可申居候

(1) 写真は「写真集、五一」に掲載されている「山口貞夫南洋行送別会記念」

(2) 平山敏治郎（一九一三）。倉田は、昭和九年の夏、当時京都大学学生の際、平山と「全国山村調査」のために神奈川県津久井郡青根村を訪れている（戸塚、一九九五）

(3) 房洲。倉田は、「上総漁村語彙」を昭和一〇年に「方言」六一一〇に報告している。その調査と思われる

3、昭和九（一九三四）年八月二十八日

（封書、半紙三枚、消印東京・8・28、宛先：芝区白金猿町七七持塚方 倉田一郎君口、差出：市外外砧村 柳田國男）

○此写真ハ再び小生の為に御焼かせ被下度候
けふかへって来て第三の写真を
拝見御手腕大進歩よろこび申居候

道祖石の一文ハ社の人も興

味を抱きましたか あの写真少し

風俗取締の方から文句が出さ

○いろいろ都合にて豫定より早く掲載此方大まこつきに候（一枚目）

うだといふ心配をしてをり何とか
もう少し写実味を消したらど

うかと申候も尚評定中に候 社の方ハ写真の方に力を入れ候

為諸君の写真を一括して見せたところこの二つの中一つに解説をしてもらひ度と申来候御迷惑

なから何れか一つ二千字二枚半以内の解説

文を急に御寄稿被下再び此写真と共に直接整理部長北野吉助【？内か？】

氏宛に御送り被下まじくや三十日御目

にか、り候時ではまに合ハぬやう申候

に付急き書中申入候一つ御努力を乞申【候か？】

（三枚目）

倉田君

二十七日

柳田

4、昭和九（一九三四）年十月二十七日

（柳田自作写真集書、消印東京・10・27、宛先：芝区白金猿町七七持塚氏方 倉田二郎殿、差出【印刷で】東京府下北多摩郡砧村喜多見 柳田國男（小田原急行・成城学園前下車））

日曜の午前ハ大抵居るつもりに候も此次の一日は講演の為外出、其次の八日も今のところ一寸不意御約束いたしかね候他の時間御指定被成候ハ、可成在宅のやうにいたすべくあまり早く約束しても忘れかちに候

(1) 自宅を撮影したと思われる航空写真。自宅と思しき場所の白い矢印がしてある。

(2) 現・港区白金台。倉田は、昭和九年に下大崎に転居（戸塚 一九九五）としたが、今回倉田が昭和九年十二月に書いたと思われる履歴書には「現住所 東京市芝区白金猿町七七番地 持塚方」とあるので、これに従って訂正する。下大崎には、少なくとも昭和九年十二月過ぎに転居したと思われる

5、昭和十(一九三五)年十月九日

(柳田自作写真葉書、消印帖10・10・9、宛先：品川区下大崎町二ノ十七 倉田一郎殿、差出【印刷で】東京市外砧村(電話二二六) 柳田國男(小田原急行成城学園前下車)

御両親様御きげんよく候や さて「現代の農業」から御礼らしきものが来てをり候 十二日夜の方言学会に御出なら持参いたすべく候 さうでなければ十一日又十三日かへりかけにこちらへ御まはり下さるへく候 先方へうけとりも 出さねハならぬ故

十月九日

(1) 写真は、柳田が百合の花?の中に立つもの

(2) 「年譜」には、柳田がこの時、方言学会に出席したという記載はない。

6、昭和十(一九三五)年十月下旬頃⁽¹⁾

(柳田自作写真葉書、切手なし、消印31、宛先：品川区下大崎口口十七 倉田一郎様、差出【印刷で】東京市砧村(電話二二六) 柳田國男(小田原急行電車成城学園前下車)

君も

○會へ出たらもう少し會らしく 話をしなければならぬと思います 大阪から帰りは汽車が こみ十日までにハ中々乗れさうにありません十七日に 延期してはどうでしょう大藤君と相談の上さうきまつたら 前會の人たちにそちらで通知して下さい君だけ欠席など、いふ ことをせぬやうにして 下さい

(1) 覚書に記したように柳田の旅行の日程から十月下旬から十一月初旬と

考えられる。

(2) 花の中に立つ柳田(写真集、七一頁)では、「昭和八年」とされている

(3) 口口十七は、二ノ

(4) 木曜会

(5) 大藤君、大藤時彦(一九〇二〜一九九〇)成城大学教授から成城大学名誉教授へ

覚書「年譜、四五〜六」によると柳田は昭和十年十月二十二日から、

十一月九日まで長期にわたり講演旅行にでかけている。十一月九日の夜行で十日朝、帰京。その日に第四十三回木曜会に出席している。これから、昭和十年と判断した。

7、昭和十(一九三五)年十月二十六日

(柳田自作写真葉書、消印帖10・10・26、速達、宛先：品川区下大崎二ノ十七 倉田一郎様急ぎ、差出【印刷で】東京・世田谷成城三七七 柳田國男(小田原急行・成城学園前下車)

急啓二十九日(2)の日よりは折口君(3)のところへいくことになり前夜より不在に候 するすでも御出下されるか又ハ御延期給はりこちらにも御目にかけてきものあり成るへくハ夜分にも居るときにたく候 あまり勉強してからだを損ハぬやう頼ミ申候

十月二十六日

(1) 柳田は、昭和十年十月二十八日奈良から大阪へ行く。翌二十九日は近畿民俗学会主催の柳田國男先生還暦記念講演会で話をしている(年譜、四五頁)

(2) 折口信夫(一八八七〜一九五三)

8、昭和十一（一九三六）年五月二十六日

〔繪葉書、消印東京砧11・5・26、『昔話研究』二巻表紙絵、橋浦泰雄筆の繪業
宛先：品川区下大崎二ノ十七 倉田一郎君 差出：東京市外砧村 柳田國男〕

御両親様恙もなく候哉 さて先に申候漁村語彙⁽¹⁾ 此頃の鬱憂⁽²⁾ をまぎらすべく いそぎ 分類し終り候 成るべく 早く まとめて 本にしたく 夜分にでも 一度取りに 御出被下度 土曜午後にも よろしく候

五月二十六日

市外砧村

柳田國男

(1) 『分類漁村語彙』(昭和十三(一九三八)年 民間伝承の会) を指す。

(2) この「憂鬱」とは、柳田の次弟・松岡静雄(退役海軍軍人・民族学者 一八七八〜一九三六)が、五月二十三日に死去し、二十六日に葬儀を行つていたので、その肉親を失つたことを指しているのではないかと推測できる〔年譜、四八頁〕

9、昭和十二(一九三七)年十月十七日

〔柳田自作写真葉書⁽¹⁾、消印砧12・10・17、宛先：品川区下大崎二ノ十七 倉田一郎殿、【印刷で】東京市外砧村(電話二二六) 柳田國男(小田原急行電車成城学園前下車)〕

中山さん⁽²⁾は二日おくれて入 京夫人ハ内科の方の病が もとで駿河臺の杏雲堂病院⁽³⁾へ多分昨日あたり入院、看病 を令嬢に托して翁は一たび帰國せられし筈消息ハ神田の岩 井館(元岩井町四〇)といふ宿屋にきけ ばわかり可申候

十月十六日

(1) 柳田が花の中に立つもの〔写真集、七一では「昭和8年頃」となっている〕

(2) 佐渡の民俗研究家、中山徳太郎のことと推測される

(3) 明治十五(一八八二)年に、佐々木東洋により創設され現在に至る。二代目佐々木政吉が、結核の名医として多くの患者を集めた。

10、昭和十三(一九三八)年三月三十日

〔柳田自作写真葉書⁽¹⁾、消印13・3・30、宛先：品川区下大崎二ノ十七 倉田一郎様、差出【印刷で】東京市外砧村(電話二二六) 柳田國男(小田原急行電車成城学園前下車)〕

御答「傳説の社會性⁽²⁾」といふ題がよいかとおもひます。此序二一つ御ねがひは荒玉水道の水路を知る地図がもし衛生部⁽³⁾の手で得られるなら借りるかもらふかして下さい 散歩⁽⁴⁾のたのしみの為です

(1) 〔写真集、七四頁〕では、自宅にてとある昭和14年頃アケビ棚の下で写したもの

(2) 日本民俗学講座(第五期)において四月二十六日から七月五日まで「傳説の社會性」について講義している〔『民間伝承』三の九、十一〕

(3) 倉田は昭和二年に警視庁衛生部衛生課に就職し、昭和十五年まで在職した。詳しくは〔戸塚、一九九五〕。

(4) 昭和十三年十月五日、毎週水曜日の散歩を始める。のちに「水曜手帖」としてまとめる〔年譜、五四頁〕

11、【昭和十三年?】六月二十六日

〔柳田自作写真葉書消印?6・26、宛先：品川区下大崎?ノ一七 差出【印刷で】

東京市外砧村(電話砧二二六) 柳田國男(小田原急行電車成城学園前下車)

昨ばん申わすれ候朝日の 八木君よりまちかへて此方 に送り来りしものあり御預り 申居候但し三九ではなく 二〇に候一應御かけ合被成てはいかゞ、是もまちかへて居 るのかもしれないす候六月二六日

(1) ポートレイトは『写真集、六九』に掲載された「三原佐代子と三原佐智子とともに(昭和8年頃)」と同一の写真。

覚書 手の怪我を心配している。倉田は「ドルメン」再興の頃手に怪我をしている(12参照)

12、【昭和十三年?】七月十一日

(柳田自作写真葉書消印?) 宛先：品川区下大崎二ノ十七 倉田一郎様 差出【印刷で】東京府下北多摩郡砧村喜多見柳田國男(小田原急行・成城学園前下車)

御手は如何、さてドルメン⁽²⁾再興に付て民間伝承 採集手引といふやうなものを書いてもらひたしと申候 に付倉田君二頼んでやらうと引きうけ申候一回四百字十枚位、三度分ほど 成るだけ見出しを多くして貴兄の経験を半素人相手のつもりで御書披下度御依頼申上候 是ハ此方の廣告⁽³⁾にもなり候こと故是非一つ御骨折を宜敷 手のよくなるまつて御腹稿を たまはり候ハ、幸に候

七月十一日

(1) 『写真集、四九』に掲載されている「富士山腹にて」(昭和8年7月23日)。

(2) 岡書院の雑誌「ドルメン」のこと。昭和七年(一九三二)に創刊したが、休刊。

昭和十三(一九三八)年に復刊。
(3) 「民間伝承」のこと

覚書 岡書院の岡茂雄(1894~1989)は、「ドルメン」復刊を昭和十三年春、柳田に相談しているので昭和十三年と判断した。「岡茂雄『本屋風情』一九七四 平凡社」

13、昭和十三(一九三八)年七月三十日

(柳田自作写真葉書消印⁽¹⁾) 宛先：品川区下大崎二ノ十七 倉田一郎様 差出【印刷で】東京市外砧村(電話二二六) 柳田國男(小田原急行電車成城学園前下車)

「歳時」⁽²⁾と重ならぬやう成るべく 早く御まとす、め被下へく候 河田君⁽³⁾の方へは話ついてをり候故見積り にハ及はず候 指定ハすべて葬送語彙⁽⁴⁾の通てよろしく 候二付是亦最初の組見本を二頁とつて見れハよろしく候 只原稿の不明など、知のミ(?不明なところのみ?) 御書かへを是も(?非?)

七月三十日

(1) 『写真集、七一』では、「自宅の庭の草取り(昭和12年頃)」となっている

(2) 『歳時習俗語彙』(昭和十四(一九三九)年一月 民間伝承の会刊)を指す。

(3) 『分類漁村語彙』(昭和十三)の奥付に、「印刷発行人 河田保治」とある。

(4) 『葬送習俗語彙』(昭和十二(一九三七)年九月 民間伝承の会刊)を指す。

14、昭和十三(一九三八)年八月八日

(繪葉書消印13・8・8、宛先：品川区下大崎二ノ十七 倉田一郎様、差出：世田谷区成城町柳田國男)

後にて考え得候校正の際に多少(く)挿入をするハあまり活版所が氣の毒に付 少しおくれても原稿にて手入いたし度候 重て御迷惑ながら一度御取戻し被下主要なるものだけでも書名御挿入被下度河田⁽²⁾の方へハ小生よりも申遣可申候この誤解ハ殊に悲しむべく候八月七日夕

(1) 縁側で老婆が孫らしき子供達と話しをしている絵

(2) 河田保治のこと。資料13(3)を参照。

15、昭和十三(一九三八)年九月十日

(柳田自作写真葉書、消印碇13・9・10、宛先：品川区下大崎二ノ十七 倉田一郎様、差出【印刷で】東京市外砧村(電話二二六) 柳田國男(小田原急行電車 成城学下車))

小さいとはいへ次々の御災難御うちの方々も御心痛と存じ候早くよくなりた まへかしと念じ候何か入用 あらハ申越可被成候

九月十日

(1) 写真は、三原佐代子・三原佐智子ととった写真。同写真を掲載した〔写真集、六九頁〕では「昭和八年頃」の写真とされている。

16、昭和十三(一九三八)年十一月十三日

(柳田自作写真葉書、消印碇13・11・13、宛先：品川区下大崎二ノ十七 倉田一郎様、差出【印刷で】東京市外砧村(電話二二六) 柳田國男(小田原急行成城学園駅前下車))

書名ハ最初から 分類漁村語彙⁽²⁾ とするつもりにて御願申置候 山村⁽³⁾、漁村も其通りに候
十一月十三日

(1) 写真は、「喜多見付近にて」〔写真集、七二頁〕に掲載されている。

(2) 『分類漁村語彙』(昭和十三(一九三八)年十二月 民間伝承の会刊)のこと。

(3) 『分類山村語彙』(昭和十六(一九四二)年五月 信濃教育会刊)のこと。

17、昭和十五(一九四〇)年四月八日

(柳田自作写真葉書、切手なし消印は8のみ、宛先：品川区下大崎一ノ十七 倉田一郎様、差出【印刷で】東京市外砧村(電話二二六) 柳田國男(小田原急行電車成城学園駅前下車))

七日の日曜ハ一家外出のこと、定まり居り葉書でもさし上げて置けばよかつたと後悔いたし候わざわざ遠方を運び何とも恐人居候御家庭御平安 母君も徐々に御恢復のこと、存候 御一同によろしく御傳へ披下度 御令弟にも大へん御世話になり申候 御贈り物御礼申候

四月八日

(1) 写真は、吹流しのボールのしたに集まった男女六人の集合写真

(2) 四月七日が日曜日にあたるのは、この当時では昭和十五年になるので、昭和十五年の通信と判断した。

- (3) 生母・倉田みき(一八八六〜一九五八)は、夫と共に昭和一〇年頃、倉田が品川区下大崎に転居してから、上京し同居。
- (4) 倉田利男(一九二二〜二〇〇六)

覚書 (2)で示したように四月七日が日曜日にあたるのは、この当時では、昭和十五年が該当するので、その年の葉書と推測した。

18、昭和十五(一九四〇)年七月十八日

(葉書消印・15・7・18 宛先:品川区下大崎十七 倉田一郎様、差出:世田谷区成城町 柳田國男)

校正刷ハ大藤君にも 見てもらひ度候に付 すんだ分からあちらへ御送付 被下度不明の点など遠慮なく御書込被下候て よろしく あれハ控へに付き口なくな つてもよろしく候
編者不明と申候はんことをのミ恐れ候

七月十八日

世田谷区成城町
柳田國男

- (1) 風景写真葉書「飛鳥風景 鴨島」(飛鳥本間壯太郎商店発行)とある
- (2) 大藤君 大藤時彦(一九〇二〜一九九〇)成城大学教授から成城大学名誉教授へ

19、昭和十六(一九四二)年一月二十四日

(葉書速達 消印・大崎・16・1・24 宛先:品川区下大崎二ノ十七 差出:世田谷区成城三七七 柳田國男)

方言研究の第二輯 きたないけれども内容が よく且つ実費も 四十七

銭 か、つて居るから五十銭で分け ようといふ委員会の決議であつた
校正がまだ間に合ふなら【三?】十銭を五十銭にかへて下さい 間に合ハぬなら次の号でかへ

一月二十四日

【スタンプ二重ナリ不明】

世田谷区成城町三七七

柳田國男

20、昭和十六(一九四二)年二月十日

(柳田自作写真葉書切手なし、消印千歳16・2・10、宛先:品川区下大崎二ノ十七 倉田一郎様 差出【印刷で】東京府下北玉郡砧村喜多見 柳田國男(小田原急行・成城学園前下車))

外の人に頒つとすると「朝日文化賞所感」⁽²⁾
といふ題ハ 少し自慢めく故に「民俗学の三十年」⁽¹⁾、「民俗学第一期」又ハ「郷土研究以後」とでもかへ 小見出しハ存したし

但し二十五日二間に合ハぬときまれバやはりもとの 通りが望ましく候又何かよい題があつたらかへてもよろしく候少し
無理トハ思ふが 此雑誌を六七百部知らぬ人ニくるといふ快味ハ味ひたく候

二月十日

(1) 「写真集、四九頁」に掲載された写真「富士山腹にて」と同じものを使用。「昭和八年七月二十三日」に撮影されたもの。

(2) 柳田は日本民俗学の建設と普及の功績により、昭和十五年、同賞を受賞した。

(3) 二月二十五日、民間伝承の会主催で朝日文化賞記念の公開講演会を開催した。

(4) 『民間伝承』のことと考えられる。

21、昭和十六（一九四一）年二月十二日

（絵葉書^①）消印千歳16・2・12、宛先：品川区下大崎二丁目十七 倉田一郎様、
差出：世田谷区成城 柳田國男

一つ申のこし候朝日の白石君の 手紙ハ會報記事にのせられぬやう 御願ひ申度 非常ニ 其ういふ 計画の外に^③ もれるをいやがり候 故御注意の方をひく閑院宮の方も よいニユウスなれど出してハ わるいと存し候 二月紀元節日 十五日に行くことになり申候柳田國男

(1) 「支那」風俗を題材にした絵をあしらった絵葉書

(2) 会報記事、「民間伝承」のこと

(3) この計画とは、七月十五日に日本郵船と朝日新聞社の共同主催で、氷川丸で横浜から神戸へ行く催しのことではないかと思われる〔年譜、六一頁〕

(4) 閑院宮は旧宮家の一つ。現在は廃絶。昭和十六年当時の当首は載仁。二月十五日、柳田は閑院宮家で民俗学の話をお進講〔年譜、六〇頁〕

22、昭和十六（一九四一）年四月十七日

（絵葉書^①）消印千歳16・4・17 宛先：品川区大崎二丁目十七 差出：世田谷区成城町 柳田國男

小池君の所へハ 返事いたし置候 是非そんなことを するのなら出版を ことわりもうし候

世田谷区成城町
四月十七日 柳田國男

(1) 写真葉書。「(日本アルプス) 白馬岳山腹の石小屋(一名登山者宿)」と書かれている

23、昭和十六（一九四一）年五月四日

（柳田自作写真葉書^①）消印千歳16・□・4 宛先：品川区下大崎二丁目十七 倉田一郎様 差出：印刷で「東京府北多摩郡砦村喜多見 柳田國男(小田原急行成城学園前)」

児童號の材料こちらにも少し有之候に付 利用なされ度伊藤作一君の手紙なども出し度候 私の文章は十七枚三頁前後ほとになり申候 清書せぬ為按【程?】なく郵送不安なれば写し可申候 赤ん坊ハ御元氣にや^④ 大事【数文字不明】よふへく候

五月四日

(1) ポートレイトは「富士山腹にて」(「写真集、四九頁」)掲載の写真であり、「昭和八年七月二十三日」に撮影したものという。

(2) 「児童號」は、『民間伝承』六〇九(一九四一、六、一)の「児童文化特輯」を指す。巻頭は倉田の「児童文化と民俗学」である。また、柳田は「鹿遊びの分布」を寄せている

(3) 伊藤作一は民間伝承の会会員、「船靈様資料其他」『民間伝承』五巻七

号(一九四〇)がある。

(4) 「赤ん坊」とは、倉田の第二子・聡子(昭和十六年生)

24、昭和十六(一九四一)年七月二十五日

(柳田自作写真集書消印帖16・7・25、宛先：品川区下大崎二ノ十七 倉田一郎様 差出：【印刷で】東京市外砧村(電話 砧二二八) 柳田國男(小田原急行電車成城学園下車))

青木君⁽²⁾に書いてもらふのハ タンボ、の童詞⁽³⁾の方が種も 面白いから是非その方をすゝめて 下さい團三郎も此際民間伝承二 くれるやう二いつて下さい磯部君⁽⁴⁾ の文にはその 問題を 是非入れるやうに御すすめを乞ふ 「傳説」にハ儘【↑?】として書添へることも 無候や
七月二十四日

(1) 写真は、吹流しのボールの下で撮影した男女六名の集合写真

(2) 佐渡の青木重孝(一九〇三―一九九四)のこと

(3) 「タンボの童詞」ではなく青木は「採集の限界」「民間伝承」六巻一〇号(一九四一)を掲載している

(4) 倉田の親友磯部忠雄か? 磯部は富山県の小学校教員時代謎を三千程集め、柳田はそれを知っていた経緯がある(戸塚、一九九五)

25、昭和十七(一九四二)年九月十五日

(柳田自作写真集書消印千歳17・9・15 宛先：品川区下大崎二ノ十七 倉田一郎様 差出：【印刷で】東京市世田谷成城三七七 柳田國男(小田原急行・成城学園下車))

「語彙」の文字ハ改める 氣がありません 今頃 そんなことを言ひ出すなら此方も出版を中止すると明言して下さい
九月十五日

(1) (写真集、六七頁)「昭和15年冬」書齋で本を手にする柳田

26、昭和十八(一九四三)年六月【日にち不明】

(封書、消印不明、和紙一枚、縦書き、宛先：品川区下大崎二ノ十一 倉田一郎様 □□ 差出：世田谷区成城町三七七 柳田國男)

国際文化振興会⁽¹⁾で南へ出て行く茲の日本人に日本の大體を知らせるといふ目的で「日本文化提要」⁽²⁾といふやうな本を出す項目八十七でその一つに日本の風俗習慣といふのを私に書いてくれと言って来ましたそれで先方を承知させた上で一つ倉田君二代作をたのむ⁽³⁾といふことになりました分量ハ六十字内外、日限ハ約一月、別に大きな故障が無ければ何とかくり合せ是非御引受たまはりたくその為には御打合せをしてもよし又振興会からハ水沢君といふ人が君をたずねますどうか少し考へてから一度来てください
六月⁽⁴⁾

倉田一郎君

柳田國男

(1) 昭和九年(一九三四)設立の財団法人国際文化振興会のこと

(2) 『日本文化提要』昭和十九(一九四四)年 国際文化振興会発行所

(3) 倉田一郎は「八章 我が民俗」を執筆している。

(4) 『日本文化提要』は昭和十九年三月五日に発行されているので、この「六月」とは、その前年の昭和十八年の六月ではないか、と推測した。

27、昭和十八（一九四三）年七月二十日

（葉書 消印千歳18・7・20 宛先：品川区下大崎二ノ十七 倉田一郎様 差出：世田谷区成城町三七七 柳田國男）

上総海岸よりの御はがき拝見 暑中御はねをりのこと、存じ候 さて「神道と民俗学」⁽¹⁾急に再版することと相成誤植だけなりとも直しおき度 存じ居り候何か御心つき点あらハ此際 支給御示被下度貴兄ハすてに御讀ミ被下 候こと、存候御たのみ申上候母君内に も御見まひのことバ申上度よろしく御傳 被下度候 初盆⁽²⁾御さびしき御察し申候 七月二十日

（1）『神道と民俗学』昭和十八（一九四三）年四月二十八日 明世堂書店より刊行、六〇〇〇部、同年十月十五日同書店より再販（全集十四巻、六一三頁）

（2）昭和十八年四月二十三日に肺炎により亡くなった、倉田の長男・穎彦の初盆のこと。

28、昭和十八（一九四三）年十二月十四日

（葉書 消印？12・14 宛先：東京品川区下大崎二丁目十七 差出：伊豆古奈温 泉白石館 柳田國男）

雑誌の相談ハまだ始まら す哉三月号からとすれハ 急ぐ必要有之小生も少し 意見有之候ニ付参加いたし度 日を御きめ御通知宅の方へ 電話被下度候こ、にはもう 一二日居て引上げ可申なほ 大藤君⁽³⁾にも出てもらふやう いたし度候十二月十四日 朝

伊豆古奈温泉白石館

柳田國男

（1）伊豆古奈温泉白石館白石館の写真葉書

（2）雑誌とは『民間伝承』のこと。

（3）『民間伝承』は、昭和十九年一月から柳田の古稀を記念し、一年間にわたり毎月共同課題をかけた特集を組み始める。三月号は「死生観特集」（二〇一号）である。

（4）大藤時彦（一九〇二～一九九〇）、成城大学教授をへて成城大学名誉教授

覚書

このあたりの年の十二月十四日に柳田が伊豆に滞在していたという記録は「年譜」にも記載がない。しかし、『民間伝承』の柳田古稀記念特集の三月号について触れていると思われるので、昭和十八年年末の葉書と推測した。

29、昭和二十（一九四五）年四月十六日

（柳田自作写真葉書消印20・4・16 宛先：品川区下大崎二ノ十七 倉田一郎様 差出：印刷で）東京市世田谷区成城三七七 柳田國男（小田原急行・成城学園前下車）

其後御障りもなく何よりに存候 御健康のことを案し居候 どうか氣のもち方即ち修養

に御力を入れ給ハリ度候 原稿ハ多少の危険ハあれど 向ふが望むなら御渡し被下候 追加ノートの袋ハ大事ニ付 安全保存の方法を御立て被下度 こ、に御持下されてもよろしく候 小生ハまだ原稿を かきつけをり候 四月十五日亀井君にハ宜敷御逢被下 度候 御母君細君にもよろしく⁽²⁾

- (1) 自宅の庭先で撮った写真の一枚と思われる。「写真集、七一頁」に掲載された写真より、「昭和六年頃」に撮影された一枚か。
- (2) この一文は、葉書の冒頭欄外に書き添えられている。

30、昭和二十(一九四五)年十月四日

(柳田自作写真葉書) 消印 ? : 10・5 宛先：富山県東礪波郡北山田村宗守
折 田又八氏方 倉田三枝様 差出【印刷で】東京・世田谷区成城三七七
柳田國男(小田原急行・成城学園前下車)

引きつづいての御苦難よくよくの御忍耐と存じまづまづ御留守番も短くてすみ是のみ御よろこびと存候一郎君ハ二十日頃上京とき、毎日待ちをり候別に病氣などでハ無之候哉御母君御子方も元気にや御やうす承り度候此方も無事に候 十月四日出
序あらハ片口氏⁽²⁾よろしく⁽³⁾

- (1) 写真は書齋で一人で椅子に座る柳田を写したもので、「写真集、六四頁」掲載されている。「昭和十年頃」の撮影という。昭和二十(一九四五)年十月三十日の葉書の写真と同一。
- (2) 片口安太郎(一八七二～一九六七)。富山の倉田の親戚で、柳田とも交流があった。
- 漢詩人として有名、富山県会議長などを歴任した。片口安太郎の姉・菊は大間知篤三(一九〇〇～一九七〇)の母にあたる(戸塚、一九九五、六七九)。
- (3) この「序あらば・・・」の一文は、葉書の冒頭欄外に書き添えられている。

31、昭和二十(一九四五)年十月三十日

(柳田写真葉書) 消印 20・10・30 宛先：富山県東礪波郡北山田村宗守 折田氏方 倉田一郎様 差出：【印刷で】東京・世田谷区成城三七七 柳田國男(小田原急行・成城学園前下車)

御手紙委曲拝見出来る なら當分御休養可然と存し候 今はぢつとしてハ居られぬ 日が来るべく候 全体に君ハ自分のことばかり考へすぎるから神経衰弱なんかになるのでそんなことを言つて居たら学問で 国を濟ふ日は到底来ぬだらうと存申候⁽²⁾

十月二十六日

- (1) 写真は書齋で一人で椅子に座る柳田を写したもので、「写真集、六四頁」掲載されている。「昭和十年頃」の撮影という。
- (2) この葉書については、柳田と倉田の関わり方を解く一つの素材として(戸塚 一九九五)で特に触れた。

32、昭和二十一(一九四六)年一月二九日

(葉書 版画)⁽¹⁾ 消印 1・31 宛先：富山県東礪波郡北山田村折田又八氏方 差出：東京世田谷区成城一ノ三七七 柳田國男

冬の御音信よろこひ拝見 御病氣一進一退のよし なれども御文面にハ病苦 あとなく闘病勝利疑なし と存候御一家御元氣何より のことに候東京も煩はしさあぢきなさハ御推想の外に候 木曜会ハ十一月以来炭無き為休會「会?」「員?」 俗累多く 雑誌復興紀念文集刊行すべて足ふみに候 戦疾中といえ不申候 一月二十九日

【オモテ】

どこが一ばん苦し いか御申越あり度 何か療治ニ付便宜 あるかもし

れず候 村と学童⁽³⁾御手に 入候より然らハ今ニ「先祖の話⁽⁴⁾」といふを送るべく候なほいろいろ計画中なれとも今 ハ皆空想に属し候 ともかくも小生のみは学問をつゞけることか出来申候 柳

(1) 絵葉書は、版画をあしらったもの。「秋田風俗 秋田市鉄砲町四五勝平得之版行(禁転載)」とある。

(2) 昭和十九年十一月二十六日の第二四三回木曜会のことか。この時以降、木曜会は休会となる。しかし、そうすると葉書の時期とややずれるようにも思われる。

(3) 『村と学童』昭和二十(一九四五)年九月三十日 朝日新聞社刊〔全集一四、六三九頁〕

(4) 『先祖の話』昭和二十一(一九四六)年四月十五日 筑摩書房刊〔全集一五、六二八頁〕

覚書 昭和二十年五月の空襲で罹災した倉田は一ヶ月後の六月に富山に疎開する。そして同年九月に刊行された『村と学童』への言及があることなどから昭和二十一年の葉書と推定した。

33、昭和二十一年二月十六日

(葉書、消印?・2・16 宛先:富山県東礪波郡北山田村宗守 折田又八氏方)

倉田一郎様 差出:東京世田谷区成城町三七七 柳田國男)

御消息重ねて拝見賜ならは少し

絶食したら必ず治るべく少なくとも自力

○総論の本ハ是非御かきなされ候やうに

す、め申

で征服し得られ可申実ハ肺炎力なんかと

○但しそれも少しよくしてからではいかゞ
思つて悲しんで居たところ也本は廣告ば

○君ハ決してあせるべき人でハない

かりでまだ一つも出ず御手に入らぬとなれハ

必ず御送り可申候ナウマン⁽¹⁾の方は大藤君⁽²⁾も 方々問合せくれ

候筈、語彙ハあまり高くなるの どころで

も取込いたし候小生の本として目下

力を入れて居るのは「新国学談⁽³⁾」といふ

ものに候⁽⁴⁾

(1) ドイツの民俗学者・ハンス・ナウマン (Hans Naumann 一八八六―一九五二)。

倉田はナウマンの『獨逸民俗学』を訳していたという。〔民間伝承〕一九四七 四〇頁〕

(2) 大藤時彦(一九〇二―一九九〇)。成城大学教授を経て成城大学名誉教授。

(3) 『新国学談 第一冊 祭日考』(小山書店 昭和二十一(一九四六)年十二月十日刊)のこと〔全集十六卷、五三三頁〕。

(4) この通信については(戸塚 一九九五、六六四頁)を参照のこと。

覚書 昭和二十一年一月三十一日、「新国学談」出版を決意(年譜、

六八頁)と、倉田の住所から、年代を判断した。

34、昭和二十一(一九四六)年二月二十三日

(柳田自作写真葉書、消印?・2・23 宛先:富山県東礪波郡北山田村宗守

折田又八氏方 倉田一郎様 差出【印刷で】東京市世田谷成城三七七柳田國男

(小田原急行・成城学園前下車)

御葉書拝見仕候 色々御不自由の中でとんだ 御心配を御かけ申何共恐入候その 御心入の品本日安着孫共とともに よろこび拝味いたし候大そう結構に候此方こそ何か 送りたいと思ひつつその日くに追ハレ 力不及候どうか幸ひの飢餓療法 二ても早く痼疾を駆逐し給はんことを念し候 御母君令室によろしく

二月二十一日

(1) 「自宅庭にて(昭和6年頃)〔写真集、七一頁〕と同じだが、顔の向きが異なる

覚書

倉田は、昭和二十年九月に除隊後、郷里の富山県に戻り西砺波郡北山田村(現・砺波町)に移住し、昭和二十一年六月頃に同郡吉江村田中(現・福光町)へ転居している。よって吉江村在住の時期と考えられ昭和二十一年と推測される。

35、昭和二十一年(一九四七)年五月二十八日

(封書、便箋三枚、宛先：富山県高岡市萩布四九〇 倉田静也様 差出：東京 世田谷区成城町 柳田國男)

思ひかけぬ電報に今も茫然として居ります 召集以来身體を痛めることばかりなので心配はして居たがまだ盛りの年だから持こたへて行くこと、のみ思つて居ました あなたの御力落しは申すまでもありませんが御母様か年を御取り被成てこの御(一枚目)別れは何とも御痛はしいことです こちらでも一同之をき、驚き又悲しみ

きつて居ます遠いところなので何の御手助けにもなりませんでしたが是からハ皆御力にならうとして居ること、信じます 私も今頃この様な悲みは堪へかたいことです しかし小さい御子の為にあなたは最も賢(一枚目)明な考へ方をしなければなりません 突つめたあきらめだけで無く是から段々ニ前途を開いて行くやうな計画を御立てになる必要がありますそれには何よりもからだを大事にして下さい御兄弟たちにもよろしく御伝へを乞ひます

五月二十八日

倉田夫人のもと 柳田國男

(1) 倉田一郎は、昭和二十二年五月二十日深夜に急死しているので、昭和二十二年と判断した(戸塚、一九九五、六六八頁)を参照のこと。

36、昭和三十一年(一九五七)年七月八日

(柳田写真葉書消印千歳32・7・8 宛先：横浜市保土ヶ谷区岩井町三 北建社 内 倉田三枝様 差出：印刷で世田谷区成城町三七〇【自筆で】柳田國男)

御望みのやうにこちらへ御引移りが出来て何よりでした御姉さん始め御親類も御力になつて下さるでしょうが何か又必要があつたらこちらへも御相談下さい五月以来少し血圧が高くて引込んでいます世話をしてくれる人があります横濱にも仲間の人があります

柳田國男

(1) 隠居宅書齋の机に向かう柳田。「写真集、一四二頁」掲載の「隠居宅書齋にて」(昭和32年頃)の写真とはほぼ同様の写真であることから推測。

■年代不詳の通信

37、【昭和十一年以降?】九月五日

(封筒、消印不明、因州和紙便箋二枚、ペン字、縦書き、宛先：品川区下大崎二ノ十七 倉田一郎様□□ 差出：世田谷区成城町柳田國男)

市谷の幼年校の前あたりに京都大学出身の中村さんといふ医学博士あり専ら和漢薬を以て病を治し看效ありと安成三郎君申され候この人夫婦共に肺炎の気味なりしに此先生の薬にていよいよ本年は二人つれにて白馬登山をしたと大よろこひに候君などの風邪は氣にするから却つてなほりにくいかと存し候 一度今のうちに此人の診察をうけ安心しなから勉強をつゝけ給ふべく候

薬礼は失費のやうなれとも愉快に働き為れはその分を取かへすことも困難ならずと在し候もし行く氣なら叔父さんにハよく話し(少しも差支なきことなれと)安成君二番地をきゝ又ハ紹介してもらひ給ふべく候西銀座の資生堂本社に毎日出て居る人に候くすりは煎薬なれと至つて飲みよきように候よけいのお世話なから御見舞の代りに奉候

九月五日

倉田君

柳田國男

(1) 安成三郎(二八八九〜一九五六)とは、昭和三年十二月八日の方言研究会の設立メンバーの一人(伝記、八四九頁)。また安成家については

研究会の設立メンバーの一人(伝記、八四九頁)。また安成家については

〔伊多波英夫「安成貞雄を祖先とす」ドキュメント・安成家の兄妹―無明舎出版二〇〇五〕がある。

覚書

柳田の住所が世田谷区成城町になったのは、昭和十一年からなので、こう推測した。

38、【昭和十五年以降?】十一月三日

(葉書 本郷湯島天神のスケッチ画の絵葉書、切手・消印なし、宛先：品川区下大崎一ノ十七 倉田一郎様 差出：なし)

高岡市中野氏を経て御送被下候 水島柿と、き申居候 今年のハことニ結構に候あつく御礼申上候 御母君御様子如何夫人もはや 御元氣にやよろしく 十一月明治節日

(1) 夫人とは倉田二三枝(一九一七〜二〇〇六)の事、倉田は昭和十五年四月に結婚しているので、この葉書はそれ以降のものと思われる。

(2) 明治節は新暦十一月三日。

39、【年代不明】十月二十六日

(葉書 宛先：品川区下大崎二ノ十七 倉田一郎様 差出：「スタンプで」東京市世田谷区成城町三七七 柳田國男)

日本の冬の草稿後半御送申候 よろしく御ねがひ申候二校段々参り 可申そのうち不審ある分のミ張り 紙をしてこちらへ御まはし被下候ハッ訂正 して直ニ弘文堂へ送り可申候御子たち 元氣にや母君内君にもよろしく

十月二十六日

覚書 『日本の祭』と推測される。

(日本民俗学会会員、国立歴史民俗博物館共同研究員)

(二〇一〇年七月二六日受付、二〇一〇年一月三〇日審査終了)